

Partial Translation of Japanese Laid-Open Patent Publication No. 10-33194

Date of Laid-Open: February 10, 1998

Application No. 8-214053

Filing date: July 26, 1996

Applicant: Takara Shuzo Co., Ltd.

Inventors: Hiroshi Ohnogi et al.

Title of the Invention:

A method for producing a saccharide or a glycoconjugate

Claims:

1. A method for producing a saccharide or a glycoconjugate comprising carrying out a transfer reaction represented by the following formula (1) in the presence of a glycosidase which specifically acts on lacto-N-bioside linkage in a type 1 sugar chain structure:



in which Gal represents galactose, GlcNAc represents N-acetylglucosamine, X represents a saccharide, a glycoconjugate, or a chemical substance which can become an aglycon, and Y represents a saccharide or a glycoconjugate.

2. The method of claim 1, wherein the glycosidase is lacto-N-biosidase.

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号

特開平10-33194

(43) 公開日 平成10年(1998) 2月10日

(51) Int.Cl. ⁶	識別記号	序内整理番号	F I	技術表示箇所
C 1 2 P 19/18			C 1 2 P 19/18	
C 0 7 H 1/00			C 0 7 H 1/00	

審査請求 未請求 請求項の数 3 F D (全 5 頁)

(21) 出願番号 特願平8-214053

(22) 出願日 平成 8 年 (1996) 7 月 26 日

(71) 出願人 591038141

實酒造株式会社

京都府京都市伏見区竹中町609番地

(72) 発明者 大野木 宏

滋賀県大津市瀬田 3 丁目 4 番 1 号 實酒造
株式会社中央研究所内

(72) 発明者 佐野 睦

滋賀県大津市瀬田 3 丁目 4 番 1 号 實酒造
株式会社中央研究所内

(72) 発明者 近藤 昭宏

滋賀県大津市瀬田 3 丁目 4 番 1 号 實酒造
株式会社中央研究所内

(74) 代理人 弁理士 中本 宏 (外 2 名)

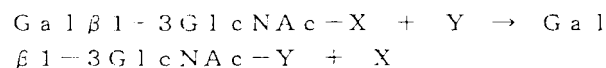
最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 糖質又は複合糖質の製造方法

(57) 【要約】

【課題】 タイプ 1 型糖鎖を特異的に、かつ簡便に付加するリモデリング反応、該反応を利用した簡便な糖質又は複合糖質の製造方法を提供する。

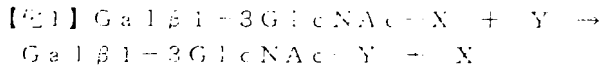
【解決手段】 タイプ 1 型糖鎖構造のラクトー N-ビオシド結合のみに特異的に作用するグリコシダーゼの存在下、下記式 (化 1) :



(式中 X は糖質、複合糖質、若しくはアグリコンとなりうる化学物質、Y は糖質又は複合糖質を示す) で表される転移反応を行う糖質又は複合糖質の製造方法。該方法により得た糖質又は複合糖質。

【特許請求の範囲】

【請求項1】 タイプ1型糖鎖構造のラクトーN-ビオシド結合のみに特異的に作用するグリコシダーゼの存在を、下記式(化1)：



(式中Galはガラクトース、GlcNAcはN-アセチルグルコサミン、Xは糖質、複合糖質、若しくはアグリコンとなりうる化学物質、Yは糖質又は複合糖質を示す)で表される転移反応を行うことを特徴とする糖質又は複合糖質の製造方法。

【請求項2】 グリコシターセカラクトーN-ビオシダーゼである請求項1記載の糖質又は複合糖質の製造方法。

【請求項3】 請求項1又は請求項2に記載の製造方法により得られた糖質又は複合糖質。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、糖鎖工学又は医薬分野等に有用な、酵素の糖質転移能を利用した、リモデリングした糖質又は複合糖質の製造方法、並びに該製造方法により得られた糖質又は複合糖質に関する。

【0002】

【従来の技術】糖質及び複合糖質(糖タンパク質、糖脂質、プロテオグリカン等)は、生物の細胞、体液、果実、種や、微生物の細胞又はその培養液中に存在し、それら生体内で様々な重要な生理活性に関与しているということが知られている。それ故に、近年、その生理活性を医薬品として利用しようという試みが盛んに行われている。更に、糖質及び複合糖質の糖鎖の修飾、又は置換を行い、その生理活性を改変し新しいタイプの医薬を創製しようという試みも行われている。糖質及び複合糖質の糖鎖の修飾、又は置換を行うには化学的方法と酵素的方法がある。これらの方法のうち酵素的方法が、タンパク質の変性を起こすことのない緩衝液等の水溶液中で実施可能であり、また酵素が特異的に作用するという点で利用されている。現在広く利用されているリモデリングの手法は、ヨーロッパジャーナル オブ バイオケミストリー (European Journal of Biochemistry)、第191巻、第75～83頁(1990)に記載されているように、エキソグリコシダーゼ又はグリコシルトランスフェラーゼを用いた糖鎖の非還元末端からの逐次変換である。また、エンドグリコシダーゼを用いた糖転移反応の報告は、ジャーナル オブ バイオロジカル ケミストリー (Journal of Biological Chemistry)、第261巻、第12000～12005頁(1986)に記載のアラリア・メンテリウム・メニスコセプチウム (Flavobacterium meningosepticum) 由来のエンド-β-N-アセチルグルコサミニダーゼD(エンド-F)に関するものと、ジャーナル オブ バイオロジカル ケミストリー

、第264巻、第19893～19897頁(1989)に記載のディプロコッカス・ニューモニエ (Diplococcus pneumoniae) 由来のエンド-α-N-アセチルガラクトサミニダーゼに関するものがある。前者はグリセロールがアクセプターとなるという報告であり、後者はグリセロール、トリプ、p-ニトロフェノール、セリン、スレオニンがアクセプターとなるという報告である。一方、糖質や複合糖質が直接アクセプターとなる糖鎖のリモデリング機構の報告としては、特開平5-64594号公報に記載のアルスロバクター・プロトホルミエ (Arthrobacter protophormiae) 由来のエンド-β-N-アセチルグルコサミニダーゼ(エンド-A)に関するものと、特開平7-59587号公報に記載のエンド-β-N-アセチルグルコサミニダーゼ(エンド-M)に関するものがある。前述のように、糖鎖をリモデリングした複合糖質の安定性や生理活性が天然の複合糖質に比べて増強されれば、医薬品に応用した場合、非常に有利である。また糖鎖において、その非還元末端にタイプ1型のGalβ1-3GlcNAc構造及びタイプ2型のGalβ1-4GlcNAc構造の2種類の構造がしばしば見出される。それらの糖鎖構造と機能の解析を行う上で、該糖鎖構造を糖加水分解酵素によって除いたり、逆に糖転移酵素によって付加するといった糖鎖リモデリング手法は極めて有用である。しかしながら、従来のエキソグリコシターセ又はグリコシルトランスフェラーゼを用いたリモデリングの手法では、糖残基1つ1つについて酵素反応を行う必要があり、反応ステップが多くなり大変煩雑である。また、前述のエンドFやディプロコッカス・ニューモニエ由来のエンド-α-N-アセチルガラクトサミニダーゼを用いた糖転移反応の場合も、糖質や複合糖質がアクセプターとなるものではない。一方、エンド-Aやエンド-Mを用いる糖転移反応は、糖質や複合糖質が直接アクセプターとなる糖鎖のリモデリング反応であり、現在、最も簡便で実用的な糖鎖のリモデリング方法である。しかしながら、これらは糖鎖において、その非還元末端のタイプ1型糖鎖構造又はタイプ2型糖鎖構造を特異的にリモデリングすることはできない。

【0003】本発明者らは以前タイプ1型糖鎖構造に特異的に作用しラクトーN-ビオースを遊離させる酵素、ラクトーN-ビオシダーゼを見出している(プロシーディングス オブ サイエンシズ アンド アーツ オブ アメリカン アカデミー オブ サイエンシズ、オプ・サ・U.S.A. (Proceedings of the National Academy of Sciences of the U.S.A.))、第89巻、第8512～8516頁(1992)、ジャーナル オブ バイオロジカル ケミストリー、第268巻、第18560～18566頁(1993))。この酵素の特異性により糖鎖中のタイプ1型構造とタイプ2型構造を識別することができるようになり、構造解析が極めて容易になった。しかしながら、糖質及び複合糖質

【0012】本発明において、前述の式(化1)中のXは糖質、複合糖質若しくはアクリコンとなりうる化学物質であり、本発明のラクトーN-ビオシターゼを用いる場合、グルコース、マンノース、N-アセチルグリコサミン、ガラクトース、アコース、キシロース、p-ニトロフェニルグリコシド誘導体、メチルグリコシド誘導体等の単糖、これらから2単糖以上が重合するポリマー、これらの2成分以上より成るヘテロオリゴマー等の糖質があり、またその末端にAsnや、Asnを含しポリペプチドが結合した複合糖質、その末端にThr又はSerや、Thr又はSerを含しポリペプチドが結合した複合糖質、ニトロフェニル誘導体、3-インドール誘導体、4-メチルウンデリルアエニル誘導体、オプチル誘導体、ヒンカルブス、誘導体等のアクリコンとなりうる化学物質でもよい。また、Xは糖質又は複合糖質であり、本発明のラクトーN-ビオシターゼを用いる場合、グルコース、マンノース、N-アセチルグリコサミン、ガラクトース、アコース、キシロース、p-ニトロフェニルグリコシド誘導体、メチルグリコシド誘導体等の単糖、これらから2単糖以上が重合するポリマー、これらから2成分以上より成るヘテロオリゴマー等の糖質があり、またその末端にAsnや、Asnを含しポリペプチドが結合した複合糖質、その末端にThr又はSerや、Thr又はSerを含しポリペプチドが結合した複合糖質、ニトロフェニル誘導体、3-インドール誘導体、4-メチルウンデリルアエニル誘導体、オプチル誘導体、ヒンカルブス、誘導体等のアクリコンとなりうる化学物質でもよい。

上より成るヘテロオリゴマー等の糖質があり、またその末端にA-Serや、A-Serを全しガリノペプチが結合した複合糖質、その末端にThr又はSerや、Thr又はSerを全しガリノペプチが結合した複合糖質が例示される。特に、Yについては、その非還元末端にC-3位が遊離の糖を有する糖質又は複合糖質を選択することが好ましい。

【0013】本発明の転移反応は、通常、原料の糖質又は複合糖質、ラクトーN-ヒオシダーゼ、及び緩衝液を含む出発溶液に、アクセプターの糖質又は複合糖質を加えて行われる。原料及びアクセプターの使用量は特に制限されず、その飽和量まで使用できるが、アクセプターが過剰に存在する状態が好ましい。通常、200mM以上のアクセプターを使用する。ラクトーN-ヒオシダーゼの使用量も特に制限されず広い範囲から適宜選択できるが、出発溶液1ml当り、通常1mU以上、より好ましくは10mU～100U程度使用すれば良い。緩衝液としては、pHが4～10程度の好適な緩衝液を用いれば良く、通常はpH5付近で酢酸緩衝液中で反応を行うことが好ましい。本発明の転移反応は、出発溶液に有機溶媒、無機塩等を加えて疎水性状態としてもより反応し、有機溶媒として、例えばアセトニトリルを用いれば、水難溶性の糖質又は複合糖質を使用することができる。ラクトーN-ヒオシダーゼの場合、40%のアセトニトリル存在下でもより反応する。本発明の転移反応は、ラクトーN-ヒオシダーゼを用いる場合、通常、室温～60℃程度、好ましくは30～40℃程度の温度下及びpH4～10程度のpH条件下に行われ、その反応条件にもよるが、転移反応は通常5分～60分程度、好ましくは10～40分程度で終了する。本発明の転移反応により生成するリモテリングした糖質又は複合糖質は、公知の手段に従って反応終了液から容易に分離・精製することができる。例えば、ゲルろ過カラムクロマトグラフィー、イオン交換樹脂カラムクロマトグラフィー等により反応終了液から、リモテリングした糖質又は複合糖質を分離し、更に濃縮、脱塩、凍結乾燥等を行うことにより得ることができる。

【0014】また、本発明の方法で製造した糖質又は複合糖質は各種糖質分解酵素の基質ともなり、各種有用酵素の検出にも用いることができる。例えば、ラクトーN-ヒオシダーゼの存在下、Glc-X(5-プロモ-4-クロロ-3-インドリル-D-グルコシド)を作用させ、得られるGalβ1-3GlcNAc-Glc-Xは一試料中のラクトーN-ヒオシダーゼの検出及び測定に用いることができる。すなわち試料中の目的の酵素が存在すれば、Glc-Xが遊離し、次にα-クリコシダーゼを用いれば遊離の5-プロモ-4-クロロ-3-インドールが青色を呈し、アサアインスターや蛍光計などを必要とせず、試料中の酵素活性を測定することができる。試料としては例えば、微生物培養液、培養

液からの精製物、動物、植物等からの調製物等を用いることができる。

【0015】上述したように、本発明の製造方法を用いることにより、簡便に医薬品である糖タンパク質に糖鎖を付加したり、あるいは既に存在する糖鎖の構造を変更を行うことが可能となり、生体内での安全性や生物活性が従来品に比べて増強された医薬品を得ることが可能となる。特に、糖の転移、浸潤にはタイプ1型糖鎖構造(Galβ1-3GlcNAc)を基本とする糖鎖が関与することが知られており、本発明の製造方法は、これらの転移抑制又は阻止のための医薬品の開発に非常に有用である。更に、本発明の製造方法で得られた糖質又は複合糖質は、糖質分解酵素の基質として用いることも可能であり、有用糖質分解酵素の検出に有用である。

【0016】

【実施例】以下に実施例を挙げて本発明を更に具体的に説明するが、本発明は以下の実施例の範囲のみに限定されるものではない。

【0017】実施例1 ラクトースへの糖鎖の転移反応

(1) プロシーディングズ オブ サ ナショナル アカデミー オブ サイエンシース オブ サ U S A に記載の方法に従って、ストレプトミセス sp 142を培養し、ラクトーN-ヒオシダーゼを調製し、以下実施例に使用した。該菌株は、Streptomyces sp 142と表示し、通商産業省工業技術院生命工学工業技術研究所にFERM BP-4569として寄託されている。1Mのラクトース(ナカライテスク社製)の水溶液1.6mlに、50mM酢酸緩衝液(pH4.5)を2.0mlと、ラクトーN-ヒオシダーゼを100mU含む酵素溶液0.2mlを加え、次いで5mM p-ニトロフェニル-β-ラクトーN-ヒオシド(ナカライテスク社製)を0.2ml添加し、37℃で30分間反応させた。その後、反応液を100℃にて3分間加熱処理し、反応を停止させた。こうして得られた反応液を凍結乾燥後、特開平1-10177号公報に記載の方法に準じピリジール(2)-アミノ化(以下、PA化と略記する)を行い、HPLCにて精製した。このようにしてPA化された転移生成物であるGalβ1-3GlcNAcβ1-3Galβ1-4Glc-PAを得た。次にこのPA化物の組成分析、NMR分析を行い、その糖鎖構造がGalβ1-3GlcNAcβ1-3Galβ1-4Glc-PAであることを確認した。

【0018】(2) 上記(1)と同様の条件で転移反応を行い、反応開始後、20分、40分、60分、120分後にそれぞれをサンプリングし、反応を停止した。こうして得られた反応液を凍結乾燥後、上記(1)と同様にPA化生成物を調製し、その収率を求めた。その結果を図1に示す。すなわち、図1はラクトーN-ヒオシダーゼを用い、p-ニトロフェニル-β-ラクトーN-ヒオシドにラクトースを転移させた際の収率を示す図であ

り、横軸に反応時間（分）、縦軸に収率（％）を示す。
図1からわかるように、反応40分後で約3％の収率を示した。

【0019】

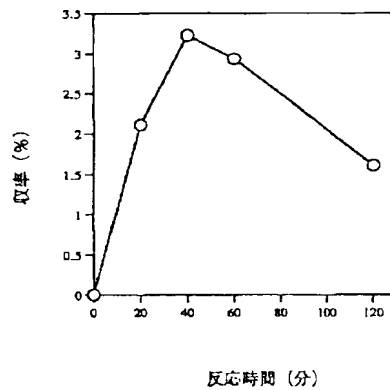
【発明の効果】本発明により、糖質又は複合糖質を直接アクセプターとする。タイプ1型糖鎖を特異的に、かつ1段階の反応で、簡便に行える糖質又は複合糖質のリモデリング方法が提供される。該方法は目的の糖質又は複合糖質を効率良く容易に製造でき、また、副生物の生成

も少なく、目的の糖質又は複合糖質の分離精製も容易であり、生体内で重要な働きを示す生理活性物質の糖鎖をリモデリングした物質の製造において有用である。また、本発明の製造方法で得られた糖質又は複合糖質は、糖質分解酵素の基質として用いることが可能であり、各種有用酵素の検索に有用である。

【図面の簡単な説明】

【図1】ラクトーNービオシダーゼの転移反応時間と収率との関係の1例を示すグラフである。

【図1】



フロントページの続き

(72)発明者 加藤 郁之進

滋賀県大津市瀬田3丁目4番1号 寶酒造
株式会社中央研究所内